古代ギリシア文化研究所 2023 年度総会および研究集会【報告要旨】
「ギリシア史研究の現在地：
　『岩波講座 世界歴史 第 2 巻 古代西アジアとギリシア』刊行に寄せて」

1.　古代ギリシアの都市国家（ポリス）　　佐藤 昇（神戸大学）

前古典期～古典期に花開いた古代ギリシアの「ポリス」とは、いったい何だったのであろうか。都市「国家」と呼ばれもするが、近代「国家」とは別種の政治体と見ることもできる。また古代オリエントの「初期国家」とも様相が異なり、同列に並べることは難しいとされる。本報告は、1990 年代以降に展開された欧米での古代ギリシアの都市国家をめぐる大きな論争をいくつか取り上げ、史料に即して再検討することで、古代ギリシアのポリス（都市国家）の特性、機能について報告者なりの見解を提示してゆきたい。主たる論点として、(1) 秩序維持機能と暴力装置の独占の問題、(2) 税制と交易振興策の問題、(3) ポリス宗教をめぐる問題を取り上げる。以上の検討は古代ギリシアのポリスが有した特性の一端を示すに過ぎないが、比較の視座を提供することで、オリエント世界との比較、後続する時代との連続と変化を研究する足掛かりとなることを期待している。

2. ミケーネ社会からポリス社会へ—考古学的証拠からの再検討　　周藤芳幸（名古屋大学）

近年におけるギリシア各地での考古学的調査の進展は、前二千年紀後半のミケーネ文明と前一千年紀の古典ギリシア文明との連続性をめぐって、さまざまな新たな論点を提示している。とりわけ、ミケーネ社会を構成していた小王国のあり方については、かつて支配的であった学説、すなわち物資の再分配センターである宮殿を核とする中央集権的な領域国家としての性格を強調する解釈に対する批判の声が高まる一方で、市場経済の意義を再評価する立場が勢いを増しつつある。また、精神文化の面でも、アルカディアのリュカイオンにおける発掘の成果などが、ミケーネ文明からポリス社会への変化を連続性の観点から捉え直す必要があることを示唆している。そこで、本報告では近年の関連する研究動向を紹介しながら、ミケーネ社会からポリス社会への移行過程について再考してみたい。

3. ジェンダーからみたアテナイ社会　　栗原麻子（大阪大学）

「楽観論」と「悲観論」の対立を乗り越えたジェンダー史は、男女・公私・聖俗の領域区分の見直しのなかでどこに向かおうとしているのか。「ジェンダーからみたアテナイ社会」では、字数の制約の許す限りで、（１）ホモソーシャルな「男らしさ」、（２）補完するものと

しての女性の 2 点から、民主政期アテナイのジェンダー構造についての現段階での見取り図を示した。前者については、「男らしさ」をキイワードとして、少年愛・市民性・奴隷・民族性といった観点から、覇権的／従属的マスキュリニティの様相を描いた。後者については、女性たちが置かれた制度的な従属性と、それに伴う社会規範、さらにそれらの制約のなかに置かれた妻・母・娘あるいは職業人としての女性たちの実践的行動を取り上げた。本報告では、その概要を紹介するとともに、ジェンダー視点を取り入れた『世界歴史』第 3 版の全巻構成のなかで、本論稿が対象範囲を民主政期アテナイに限ったことについての弁明と、近年の研究動向を踏まえた積み残しの課題についての補論を試みたい。

4. アケメネス朝ペルシア帝国とギリシア人　阿部拓児（京都府立大学）

古典期のギリシア人は、巨大な隣人であったアケメネス朝ペルシア（人・大王・帝国）のことを、どのように眺めていたのであろうか。前世紀末いらい、このような問いはさかんに議論されてきた。そこで、本稿（岩波講座所収の論文）では、この視点をひっくり返した問いを立てた。すなわち、アケメネス朝ペルシア帝国、その頂点に立つペルシア大王は、ちっぽけな隣人であったギリシア人のことを、どのように眺めていたのであろうか。
ペルシア大王は、ペルシアを中心とした遠近の地理的な広がりと華夷思想で世界をとらえていた。それと同時に王は、この世界が多様性にあふれていることも承知しており、みずからはその監督者の使命を与えられているとも自覚していた。たしかに、彼らペルシア大王の世界観のなかで、ギリシア人は最遠の地に住む、取るに足らない存在だったかもしれない。しかし同時に、ギリシア人は多様性に満ちたこの地上世界の構成員でもあり、ペルシア大王は監督者としての責任感から、彼らギリシア人にたいして、硬軟織り交ぜつつ一貫した配慮をかけてやったのだ、というのが本稿の主張である。

5. ヘレニズム時代のポリス世界　　長谷川岳男（東洋大学）

従来、衰退期と見なされがちのヘレニズム時代のポリスについて、その現実を対外的な「自律性」に注目するとともに、古典期との比較によるポリス内部の状況も視野に入れて、前 2 世紀初頭のエラテイアで決議された碑文（*ISE* no.55）の文言の分析から紹介する。特にローマの進出によってそれまでの諸王国からなる多極的な世界が一極的世界へ転換することが、ポリスの変化にどのように影響したかを展望として指摘して、第三巻の藤井論文への接続を目指した。余裕があれば、本稿では詳しく扱えなかったローマの支配による変化に関して補足をしたい。